

ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと、風

第99号 (2014年8月)

風に吹かれて (77)

白井啓治

『明日が当たり前にやって来るなど

勝手に決めるなど風のいふ』

7月の12日だったろうか、東北地方太平洋沿岸を中心に震度5以上を示す地震が来た。長い時間の揺れであった。当地にも大きな揺れがあった。3・11の再来を思わせるほどの長い揺れであった。丁度その時であった。相馬市へ支援コンサートキヤラバンに出かけていた友人達がその地震に遭い、しかも津波警報までも体験し、地震と津波の恐怖体験をしたことを、フェイスブックに知らせられた。

それでそのメッセージにこんな文を送った。「自然を意識しない私達は、今日と同じ明日は当たり前な事にやって来ると思いがちだけど、決してそうではないんだよね」と。

実際、私達は、明日という今日と同じ日が当たり前になって来ると錯覚を起こしているが、そんな事は決まてないのだ。今日と同じ明日がやって来るのは、時の刻みだけなのである。

何も考えずボーンとしていっていると、昨日と同じ今日がやって来たと思ってしまうのであるが、凝らして見るとやって来た今日は決して昨日と同じも

のではない。当然、やって来る明日は今日と同じではない。当たり前になって来るのは今日という時だけなのである。

毎日違った今日がやって来るのであるが、やって来た今日の出来事をニュースで知ってみると、実に末世的な話しの多い事か。政治・経済・社会面の全てに希望を見失ってしまう様な話しばかりが羅列されている。

しかし、希望というのは絶望と思われるときにあるべき姿としての道筋をたてるということなのだから、絶望を思う時程大きな希望を思考することが大切なのである。

7月の末は、この地に来て出来た数少ない我が友人たちが相次いで手術台に乗る事になった。取り敢えず皆無事生還したが、明日はわが身を覚悟することの必要だなと、しみじみと感じている。自分だけに、今日と同じ明日が当たり前前に来るわけではないのだから。

友が手術する前日であった。こんな一行が思い起こされた。

『遙々とやってきてまた遙々と明日を歩く』  
歳を数えると確かに遙々とやって来た。しかし、幾つになろうとまた明日を遙々と歩いていくしかないのである。命は何時かは尽きるものであるが、

## ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

明日尽きると知っても今日は希望を思考して歩く以外ないのである。だからこそ人生愉快なりと声することが出来るのであろう。  
猛暑の中、殺伐としたニュースだけが飛び交っているが、だからこそ希望を思考して歩くことが人生の愉快を創ることになるのだらう。  
庭の二坪菜園からは、毎日黄金トマトが数十個収穫できる。それをおやつ代わりに齧りながら血液サラサラ、夏元氣と口遊んでいる。

私は多くの外国を見たわけではないが、先進国と発展途上国では、社会インフラの整備に、大きな開きを感じる。先進国は、これでもかと言わんばかりに、きらびやかに社会資本が充実し過ぎている。巨大なビルの林立、高速化した交通機関、過剰に発展するIT産業など、人類は、そこまでやる必要があるのかと、ついつい首をかきあげたくなる。いつも、そこに先進国の奢りを感じ、地球全体のアンバランスに疑念を感じる。

先進国に着いて、すぐ目につくのは、空港・港湾・鉄道・高速道など交通機関の整備が顕著で、工業の発展が目覚ましく、物流や人の往来が盛んである事。これに対し、発展途上国は、インフラ整備が間に合わず、自然はそのまま。時間がゆるやかに流れている。

考えてみれば、「成果主義」とやりに縛られ、コマネズミのように、セカセカ走りまわる文明国のサラリーマンより、ゆるやかに流れる悠久の時間をしっかりと楽しんでるように見える途上国の人々の方が、はるかに幸せそうだ。特に熱帯地方では、日中の暑さのせいもあるが、夜遊ぶために昼休みをたっぷりとっているように見える。

先進国のブラック企業・最近ではブラックバイトとやら、正に外道だ。過労死を招くような企業など、絶対にこの世から追放しなければならぬ。文明が緩やかに進歩すれば、自ずと子孫達にゆとりが見られ穏やかな暮らしをエンジョイできる。ラテンアメリカの底抜けの明るさ。豊かではなくとも、あの明るさが、正に宝だ。

\*

私は17年前、畜産に関する技術移転の国際協力の仕事で中米滞在中、国道を車でよく走った。熱帯のスコールでいくら整備しても道路は崩れ、穴があき、大きな石が転がっている。これに対し、国民が文句を言えば『穴に落ちて死ぬヤツはバカ!』これで済まされる。何と無責任な! 国道ならば国家が責任を持って常時整備しておけ! と怒鳴りたくなるが、よく考えてみれば、産業がなく、物流も知れたもの。そんなに道路整備に金をかける余裕はない。『自分の命は自分で守れ!』ゆつくり走れば、穴も石も避けて通れるだろう。頭冷やして出なおして来い! と怒鳴り返されそう。

広大な牧場のど真ん中を国道が走っている。国道は時速100km出しても良い。いわば高速道である。にも関わらず、小学生も歩けば自転車も走っている。勿論道路の脇には、牛や馬などの侵入を防ぐ柵などない。牛はゆつくり道を横切るが、馬は車の直前を走って横切る。当然牛は無事で、馬はしばしば事故にあう。大怪我をした馬は放置され、死を待つばかり。死ねばスピロテという巨大な驚が舞折り、あつという間に骸骨だけにしてしまう。勿論人も車も被害は大きい。さすがに人の命は大事にされるが、それよりも年収5年分ぐらい出さなければ中古車1台買えないのだから、車はすぐに回収され修理される。

現地で、日本のスズキの「SAMURAI」という軽自動車は大変な人気。30万km走った中古車が日本円で40万円と言っていた。日本で10万km走ったら廃車など、とんでもない話。先進国の奢りの象徴。資源の無駄遣いもいとところ。とにかく、道路事情が悪いのだから、セダンタイプの乗用車は、尻餅をつくの役に立たない。喉から手

が出るほど欲しいのは、私共プロジェクトの4駆パジェロやランドクルーザーの類。ところが、これらの車輛は当然ギヤングが常に目を付けている。それゆえ私がかの国で田舎に出張する時は、専属運転手・通訳・銃を持ったガードマンが1セットで、身を固める必要があった。4駆の車欲しさにギヤングに狙われる。そして日暮れまでには必ず帰ってくるように命じられていた。なにしろ警察官は国家公務員だが年10カ月しか給料がもらえない。後の2か月は自分でバイトでもしろ! という訳。一度だけ田舎でチンピラギヤングに襲われた事があったが、我がガードマンは簡単に追い払ってくれた。勿論仕事の帰りには郊外のドライブインで、3人に夕食を御馳走する。一人わずか300円ほどだが、これで大盤振る舞い。なにしろ彼等の通常の昼食代が50円くらいであった。

\*

ついでだから話すが、途上国の国営発電所は、予算が少なく、しょっちゅう停電。極度の不便さをいやというほど味わってきた。ある時私はホテルで、夜中にマシンガン乱射の音で目を覚ました。どんな事件があったのかと翌朝通訳に聞いたら、ホテルの近所に住む50歳くらいの男。懸命に働いてやつとテレビを買った。大好きなドラマやサッカーの試合を見ていたら突然停電。頭にきて、自分のマシンガンを持ち出し、自宅の塀に向かって銃弾をブッパナシタのだという。旧ソ連が崩壊した時、世界中にソ連製の武器が安売りされたという。それゆえ庶民が立派なガンを持っている。普通の人が常に拳銃を持っている。

話は変わるが、スペイン系の超美人娘が、私のようなおじさんをダンスパーティーや食事によく誘

う。ダンス(ランタ・サルサなど)は確かに楽しい。そして食事をおごるぐらいなんでもないが、風の吹きようでいつ何時、娘の裏にどんなヤクザが潜んでいるかわからない。それが怖いから、公的なパーティー以外、遠慮を申し上げた。

一方これは心配のない話だが、プロジェクトの事務員でカルメンという名の美女がいた。170cmくらい。超美脚。酒場で我らのリクエストに応え、フラメンコを舞う情熱的な艶姿あてですが、正に絶品。今も頭から離れない。

私はプロジェクトから日頃、市中バスには乗るなど言われていた。理由は、しばしばバスジャックが乗り込んできて、身ぐるみはがされるからの事。抵抗すれば殺される。治安と衛生の良さに慣れ切っている日本人は、全くの平和ボケ。私は滞在中、飲料水や調理・洗面水は当然安全な買水を使っていたがシャワーだけは水道水だった。それしか原因が考えられないが「アマーバ赤痢」に感染。3日で7kgも痩せ、死線をさまよった事もあった。国際協力も正に命がけ。

男子たるもの60歳までは家族を養う義務がある。ただし還暦過ぎたら余禄の人生。オレの好き勝手生きさせてもらう。いい歳をして若気の至り：もないが、5千万円の生命保険に強制加入させられ、インソトと出国。あの治安や衛生状況では、無事帰還は御の字。それがヌケヌケ生きて帰ったもんだから、女房のヤツ、がっかりしたかな？

\*

さて今、日本は、原発再開をどうするか議論沸騰中である。それは水や空気と同じ、電力も欲しければいくらでも手に入る習慣にどっぷりつかって、**停電頻発**の怖さを知らない平和ボケだからで

ある。夏冬、電力大量需要期に**強制節電**。手術や透析の最中や工場の流れ作業中に予告なしに突然停電などあったら、それは一大事。電車は動かず、交差点の信号は消え、街灯は真っ暗。電動シャッターは開かず閉らず。未熟児の保育器・リハビリの各医療器具・家庭の電化製品の諸々。電気釜で炊飯中の停電はガンダメシ(たぶん石岡誌)。熱波・寒波の最中に冷暖房機が使えない。熱中症多発。そしてオール電化は宝の持ち腐れ。だからと言って各戸独自に自家発電機は無理というもの。電力依存社会は大バニック。日本のGNPは、たちまちストンと落っこちるに相違ない。

税金は上がり、年金や福祉関連の受給額はたちまち急降下。ニート、ホームレスなど巷に溢れる。老人は惨めな最後。犯罪多発は目に見えている。原発はその辺を勘案して、国家百年の計をしつかり推し量って、再開の是非を決めたら良い。地球温暖化と熱中症頻発など身近に迫っている現状。又自然エネルギー発電の充足能力など十分考慮の上、国家の進路を定めたら良い。感情的で、ヒステリックな扇動に左右されてはいけない。

【この間、私は放射能の専門家と長時間話をしたが、選挙の票を心配する人や、大衆受けを案ずる御用学者やマスコミの煽りに左右されないよう、ここは冷静な判断が必要とのこと。風評被害で福島県は死活問題だ。放射線レベルが高く、国の定める立ち入り禁止区域で、3年過ぎた今日、ネズミ・犬猫・イノブタなどが猛烈に繁殖しているという事実は、極端な一部を除いて、生命を脅かすほどの放射線量ではないというあかし(但し数十年後これらの子孫が、どうなるかは長期観察が必要。それに、原発のある沿岸部の日本人は、日頃ワカメ・昆布な

ど海藻を存分に食べているので、甲状腺被曝を避けるための「ヨウ素」は、殆どの人がすでに予防注射を受けている状態に置かれている。外国のデータがそのまま日本に当てはまるわけではない。そのような基礎的知識をマスコミは報道していないため、庶民は盲目的に恐怖におののいている話。むしろ正当な論評が、異端視されているのが、今日の日本の状況だという。】

原発問題は、べらぼうな借金大国の日本が、輸入化石燃料を燃やし、地球温暖化ガスをまき散らし、国富を毎年4兆円ほど喪失している現実をどう判断するか。一般家庭や中小企業が益々値上がりする電気料に、どれだけ耐えきれるか。電気料金が高く、企業の税率が高いため、企業が日本を脱出する産業の空洞化をどう防ぐか。原発反対のドイツが、原発で発電した電力をフランスから輸入している。パロドックスをいかに解釈するか？ 国家百年の計を念頭に、物事は総合的に、冷静に考えるべきである。

\*

さて本題に戻って、地球環境の破壊は、先進国がその大方を押し進めたと言える。産業革命以来、地球温暖化ガスCO<sub>2</sub>は上昇する一方で、気温は0・74℃も上がった。その弊害は、これまで何度も書いたので省略するが、海面上昇だけではなく、熱帯の恐怖の伝染病が、多くの人口を抱える温帯でも大流行。これは致命傷だ。今からでも遅くはない。愛すべき子孫のためにも、21世紀の叡智を結集し、正すべきは正し、全ての生物が安心して住める心地よい惑星を取り戻すべきだ。先進国の奢りを、例をあげて検証する。序列はともかく、私が驚いたのは1969年から開発さ

れた超音速旅客機「コンコルド」。マッハ2で飛び、騒音・排気ガスはものすごく、超高価で、燃費が極めて悪い。長距離滑走路が必要なのに、航続距離は短い。空中給油がなければ日米間など、太平洋横断ができない。音速を超えるため、空気抵抗や機体は摩擦熱との戦いであつたようだ。乗客はわずか100名。しかも事故(滑走路の落下物を巻き上げ、機体損傷で離陸直後乗客乗員全員死亡)まで起こし、世界中から発注取り消し。わずか20機のみで76年製造中止。2003年で全機が退役。石油ショックや環境保護団体の猛烈な反対もあり、共同開発した英仏は、断腸の思いで製造中止を決断した。暴走する先進国の中でも、さすが英仏には、未来を見つめる良心があつたようだ。奢れるものにも、反省が伴えば、次の進歩がある。

\*

次に私が日頃心を痛めているのは、**新薬開発競争**。勿論人命を救うためだが、他社に先んじて利を求める影が見え隠れ。耐性菌など多い今日、新薬は必要だ。医療の進歩で抗菌剤の貢献は大きい。が乱用は耐性菌を生み、その対策として新薬が求められる。(抗生剤乱用には、我が獣医領域も多少の関与がある。利を求める産業界には、大きなデメリットもある。)新薬開発のためアフリカ奥地の森林などをかき回し、抗菌剤を産生する真菌などを見つけ出し、文明国に持ち帰り実験動物などから、とんでもない熱帯の感染症が文明国に蔓延。強烈な死亡率を示す。そのよい例はエイズである。エイズは、1983年フランスのモンタニエなどが、アフリカの患者のリンパ節から、ヒトレトロウイルスを発見、これがヒト免疫不全ウイルスで、エイズを起す。元々このウイルスはアフリカミドリザルが起源と考え

られていたが、最近ではアフリカ西部に生息するツエゴチンパンジーに常在するウイルスでチンパンジー自身は発病しない。しかし、このチンパンジーを実験動物などに使用、ヒトに接触すると人間に強烈なエイズ感染症を起す。感染した人は性行為・輸血・母子感染などでたちまち世界中に拡散した。ジャングルへの深入りが災いのもと。眠れる獅子を無理やり揺り起こした感じ。文明国の奢りだ。しかしこの件に関しては先進国の謙虚な反省はなく、性懲りもなく最近再び凶悪な事態が発生した。今年アフリカ西部のリベリアで、世界最悪の国際伝染病「エボラ出血熱」が集団発生。769人が感染して467人死亡。死亡率60%である。エボラ出血熱は、スーダンなどで1976年に発見された極めて死亡率の高い世界最悪の伝染病である。忘れた頃に悪魔は再び牙をむく。リベリアはアメリカの開放奴隷が移住して、1847年に独立した国家である。便宜置籍船制度により、世界一の商船保有国。そのため、外国人の出入が激しく、世界への伝染が危惧される。さらにアフリカには、エボラ出血熱同様、「ラッサ熱」や「マールブルクウイルス」による強烈な伝染病がある。グローバルな経済交流も良いが、このような、巨大なリスクがあることをしっかりと自覚する必要がある。「利」をむさぼる行為には、人類滅亡につながるかねない凶悪な伝染病が、世界に蔓延する可能性は大である。

\*

先進国の奢りが世界を恐怖のどん底に陥れる例は多々あるが、「リーマンショック」は正に世界最大級の金融危機を招いた。2008年9月15日、アメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズが、史

上最大の負債総額<sup>64</sup>兆円を出し破綻した。その後世界は連鎖的に金融危機を招き、大不況に見舞われた。日本でも株価の大暴落、急速な円高ドル安により、輸出産業が大きなダメージを受け、大不況に陥った。一国の銀行が破綻しただけで、全世界が大不況に陥る。何のための文明の進化か？何がグローバル化だ？社会の安定や正義は、欲の塊みたいな巨大金融機関によって、いとも簡単に捻りつぶされてよいものか？国連など世界的組織が、なぜ未然にコントロールできないのか？

\*

次に気がかりなのは、**IT産業の過熱**。私はそれに疎いせい、これといった被害もなく過しているが、サイバー攻撃とやら、金融トラブルなど毎日、新聞を賑わしている。老人等弱者を狙う卑劣な行為には我慢ならない。にせ電話で老人から金を巻き上げる悪の権化。なぜこんな事ができないような社会システムが進歩しないのか？大金が動く時のセキュリティシステムが、なぜ金融機関に進歩しないのか。客を大事にする努力が足りないような気がする。ある日の新聞川柳に「本物の息子は電話 かけてこず」とあつた。こんな悲劇を防ぐためにも、家族は日頃、深いきずなで結ばれていなければならない。

先進国は、勝手気ままに文明を押し進めてきた。そのおかげで発展途上国まで、巻き添えをくい、えらい迷惑を受けている。「現在の地球は、子孫からの預かりもの」という概念をしっかりと頭に入れた上で、先進国は文明を押し進めるべきである。向こう見ずの文明進化は、人類滅亡につながる。

今年の夏はエルニーニョの発生で北日本は冷夏だと騒いでいたが、何の事は無い梅雨明けと共に物凄い暑さに襲われている。

体力が無くなつて来ているせいもあるうがこんなに暑いと夏を乗り切れるか不安になる。

病院の健康診断で毎年異常値を指摘され薬も処方されているが、薬嫌いな私としては運動不足を解消すればある程度数値も良くなると期待して、7月の初めより毎朝近くのウォーキングを始めた。今は朝5時頃から1時間くらい速足で歩きまわっているが、この時間でもたくさんの方が歩いてたり犬の散歩をさせていたりする。この早朝散歩で公園や街中の路地を歩いたりすると今まで見えなかった自然や町の姿が見えてきたりして楽しい気分させられることも多い。

何時も通る森でウグイスがきれいな声で縄張りを主張しているが、これも真夏が近づき日毎に、鳴き声が短くなつていくような変化を感じたり、池の蓮の花が池の周囲を廻っている三十分程の時間につぼみから開花していく様子が見えたりする。こんな自然の変化を敏感に感じる事が出来るのはまさに「早起きは三文の得」ということだろう。

また朝顔の花が早朝から咲いているが、この咲く時間には朝顔の持つ不思議な体内時計が関係しているのだと言う。前の日の日没から丁度十時間後に花を開くという規則正しい体内時計を持っているのだそうだ。こうして鳥や花を愛でていると新たな知識が広がることに少し満足感を味わうことが出来て一石二鳥でもある。

また、街中を歩く時は普段歩いたことのない路

地に入りこむ。そうするとそこでは昭和初期から半ば頃の忘れられたような面影をよく発見する。

もうとつこの昔に閉店となり看板だけが残され、その看板に「鳩レース」の文字を見つけた。そして「鳩レース」とはどんなものだろうと想像をたくましくし、ネットで検索すると日本では現在2カ所にしかない国際委託鳩舎が八郷地区(片野)にあることを発見する。まあこんなことで新しい発見があれば、そこには別な興味のそそられるネタが必ず隠れている。このように一つの事柄を見つけてその裏に隠れているもう一つの顔を探すのも楽しいものだ。

これも地域掘り起こしをめざして始めたブログ「まほらに吹く風に乗って」がこの夏で4年を迎えるが、毎日欠かさず続けて来た成果と言えるかもしれない。

さて、前置きが長くなったが、今回の話のテーマ「ダブルスタンダード」について少し書いてみたい。ダブルスタンダードとは、二重の異なる基準(スタンダード)を持ち、人種・民族・国・身分などの違いにより使い分けることを言うが、スタンダードが一つでもその判定基準(Criteria)クライテリアが曖昧ではつきりせず、それを使う人により都合のよいように使い分けることなども含まれるだろう。

日本の基準は、どうも判定基準を明確にして、誰が解釈しても変わらないようにすることを吉としない風潮があるようだ。これは日本人が気がつかないでいる場合も多く、日本人の美德だと変に思い込んでいる節がある。日本語と言う素晴らしい言葉の持つ負の面だと私は思っているが、文学で曖昧な表現が好まれるのは良いが、法律文書や

海外とのやり取りなどでは障害になることがある。

また、私は仕事でパソコンプログラムなども組むが、今までの判定基準を計算や検索プログラムに組み込む場合にこの曖昧さに戸惑うことがよくある。日本人は「大体これくらい」だとか、「こう言う場合はこうしなさい」などと一見よきような表現が全くプログラムにならないのだ。「数値としてこの場合はこうせよ。そうでなければこちらの判断に従え」と明確に指定しなければパソコンは判断ができない。「そんなこと言ってもこの数値から判定が変るなどと明確に決められないよ」などと言う声も良く聞くが、暫定的にでも決めて判定し、不具合がでた時に自動的に修正をしていくというPDCAサイクルの考え方が欧米には多いのである。

日本の官僚の作る法律文書でも後から解釈を変えてしまえば最初に説明した内容とは違っても良いと本気で考え、それが優秀な官僚だと思いつている人もいる。これは政治家も同じだ。

例えば消費税の生活必需品にかかる消費税に軽減税率を導入する議論がある。消費税を8%と10%の2段階の値上げとした時に、この軽減税率の必要性やその手続きの複雑さなど検討する時間が足りないのでは8%にする段階では間に合わないかと判断し、「消費税の軽減税率制度については、『社会保障と税の一体改革』の原点に立って必要な財源を確保しつつ、関係事業者を含む国民の理解を得た上で、税率10%時に導入する」と平成26年度与党税制改正大綱に書きこまれた。この税率10%時というのが曖昧な表現で、10%にする時と同時に軽減税率を導入するのか、10%からその先の値上げもあるので10%の消費税を適用

している期間のどこかで導入するのだから意見が分かれていたのだ。こんなことであるだろうか。日本語を曖昧にして裏でほくそ笑んでいる政治家や官僚の姿が浮かぶ。これが日本の政治である。まったくもって情けない。このような文章を作成した事を恥じるべきだと思う。こんなことに労力を使うくらいならさっさと議員定数の削減をする約束を守ってほしい。どうも日本人は単一民族（これはあくまでも大和民族を言っているであって歴史的に見れば単一民族ではない）国家であり、考え方の思考が統一されているので曖昧でもやっていけるのだろう。

もし異なる民族が混在する国であったならば、このような曖昧表現は逆に命取りになるであろう。

最近中国で賞味期限切れの肉を他の製品と混ぜてマクドナルドやファミリーマートなどの製品に使われていることが判明した。最初のうちはまた中国でこんな品質チェックがでたらめな事が起きたと思っていたが、その後中国での報道のトーンが変ってきた。すなわちこの中国の生産工場はアメリカ資本の工場で、アメリカ品質でなければいけないのに、この親会社はアメリカ品質と中国品質を差別して十分な品質体制がなされていないかつたといいたのだ。アメリカは中国ではアメリカ国内と異なるスタンダードを適用しており、ダブルスタンダードだと騒ぎ始めた。中国のこの報道も一方的に受け取ることが出来ないが、アメリカのダブルスタンダードは今に始まったことではない。

イスラエルなどに対してはガザ地区への空爆や地上戦で多くの民間人が犠牲となっていることを受けて国連の人権理事会がイスラエル非難決議を採択したが、これにアメリカのみが反対（日本など

17ヶ国は棄権）した。今まで何度もアメリカはイスラエルが非人道的な戦争をしても最後はイスラエル擁護にまわる。口で言うことと国として判断することは違うと言うまさにダブルスタンダードである。私はイスラエルが悪いと言っているわけではない。「ハマスが悪い」「イスラエルが悪い」などといってお互いが争い、多くの民間人に犠牲が出ている現実をみれば争いを止めることに全力を注いでもらいたいと思っているのだ。

ウクライナでの親EU派と親露派の争いについても日本の多くの報道は本質から外れているように気がかりだ。これもEUとアメリカなどが本音と建前を使い分けているダブルスタンダードを持っていることによるものかもしれない。私も仕事でウクライナは二度訪れているが、旧ソ連から1991年に独立したが、もともとヨーロッパに近い民族と、ロシア人およびそれに近い民族の2つの勢力が対立したままだ。大統領がどちらの勢力がなるかで国の方針が振り子のように行ったり来たりする。

親EU派が大統領になって、ソ連時代に使われていたロシア語を学校教育の段階から完全に排除した。それまでの親露派の大統領時代にはウクライナ語とロシア語が両方許容されていたのである。言葉というのはそう簡単に変えることは出来ず、現実は今でもロシア語は多くの場所で行われている。ウクライナ国内のロシア人の割合は20%以下だが、家庭で使われているロシア語とウクライナ語の割合はほとんど同じくらい（共に約40%で、両方を使う家庭は約20%）となっているのだ。特に東部地区の年配者はロシア語がほとんどである。今はマレーシアの民間旅客機が墜落した責任を

## ギター文化館

### 2014 CONCERT SERIES

- 9月 7日 福田進一 ギターリサイタル
- 10月 5日 村治奏一 ギターリサイタル
- 10月18日 長谷川きよし コンサート
- 11月 2日 樋浦靖晃 (G) & 芝草幹夫 (FL) コンサート
- 11月 9日 里山と風の声コンサート 亀岡三典 (G)
- 11月16日 おがわゆみこ オカリナコンサート
- 11月30日 スペイン歌曲コンサート

黄子珊 (ソプラノ) & 角圭司 (ギター)

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel 0299-55-4411

めぐって情報合戦がし烈を極めている。しかし本質である戦闘地帯の上空を飛んだマレーシア機の責任も免れない。これも前に起こったマレーシア機の事故が影響しており、燃費節約で最短距離を飛ぶことになったマレーシア航空会社も巻き込まれる危険があった空域を飛んだと言う事態も当然追及されねばならない。

ロシアについてはプーチンが悪いのだと一方的に決めつけロシアへの制裁を主張するアメリカだが、EUは天然ガスの供給を受けているので制裁も口で言うのと実際の行動が違っている。わが日本はどうかというと、どうも私の周りの人に聞くとプーチンは人気がなく、感情的に親露派やそれを後ろから支えるロシアへの風当たりは強い。私は、これは一方的すぎると思う。ロシアの欲しいのはクリミアだけでいいはずで、親露派をテロとって攻め立てるウクライナの親EU派の正規軍がこのウクライナを自分たちに都合のよい人種のみしか認めない考えが続けば悲劇は拡大するだけである。

映画「ひまわり」でソフィアローレンが一面のひまわり畑でその下に眠る戦士たちの墓を探し回るシーンをいまでも思い浮かべることがあるが、私が訪れたウクライナには、あの映画のシーンと同じ一面のひまわり畑が広がっていた。映画の撮影がウクライナかどうかはわからないがヘンリーマンシーニの悲しい曲があつたシーンとともによみがえるのである。産業が乏しいウクライナで旧ソ連時代に作られた各種産業の工場は親露派のいる東部に集中している。そして格安で供給されているロシアからの天然ガスで国の利益を上げている。ヨーロッパに供給される天然ガスもほとんどがウ

クライナを經由しているもので、これを途中で抜き取って売ろうとまでしている。ロシアとしては面白いはずがない。この親露派住民をクリミア自治国に移し、今の西部・東部を親EU派に統一することが目的かもしれないが、このまま親EU派で国がまとまったとしても、すぐに財政が行き詰ってしまうのではないかと心配である。

日本政府は集団的自衛権容認を閣議決定したが、このダブルスタンダードを持つアメリカを真の同盟国として信頼できる相手なのかどうかは大いに疑問がある。知らず知らずに他国との戦争に巻き込まれていくことが危惧される。その時にこれが自国のためだったのかと後から後悔しても戻ることとは出来ない。国民が覚悟を決めたのならこれは民主主義でやむを得ないが、知らされていたことと中身が違うダブルスタンダードであつたと後から後悔することだけはしたくない。

積極的平和主義、原発の安全性審査では「世界一厳しい安全基準」などという言葉で美辞麗句のようなことを並べたて、誰も責任をとらない体質では、何時まで経つてもこの国は三流国家と言わざるを得ない。もちろん首相が「私に責任がありません」などと言つたとしてもそれは責任あると言ふことではない。原発では再稼働を前提にせず、どんなことがあつても被害はここまで抑えられろといつた具体的なハード・ソフトの両面で国民に説明することが責任ある人の態度であることは言うまでもない。ノルウェー、フランスなどの最新の原発設備基準などと日本の置かれた地形なども考慮に入れた比較検討が全くなされていない状態で再稼働などんでもないことである。この核のゴミ処理の費用などを電力料金に加算したら、

いつまでも原発にしがみつくと電力会社も無くなってくるはずだ。原発族と呼ばれる人たちもダブルスタンダードをやめ、日本のこれからのエネルギー政策を真剣に論じてほしいものだ。

### あの輝きをもつて

伊東弓子

江戸時代の人別帳のページに「不縁のため離別」と書かれて名が消されてあるのをみたことがあつた。今、離婚した、別居したは日常茶飯事で驚くことでも嘆くことでもなさそうだが、大人はいいとして子供にとつてどうなのだろう。子供の数が少ないから子供同士で鍛え合うことは殆どなく心配だ。わしの子供の頃は戦争で父親が亡くなつたり、母親が病気でなくなつたり、子供が親戚や社会に放り出された。そういう状況の中で子供達は必死で生きてきた。あれから七十年経つて価値観が全く変わった。戸惑うことばかりだ。鍛え合う機会のない現代つ子と老寄が腕を組んで必死で生きていかなければならないのだ。わしにはあの輝きの赤い玉と希望の金の輪は人生をずっと支えてくれてきているのだから自信をもつていこう。

わしの幼かった頃の話しを思い出している。わしは貧しい漁村に住んでいた。先祖は大部、昔ある戦いに敗れてこの地に流れてきたという話だ。家の周りの僅かな土地は農地解放でやっとなり自分の物になった田圃と畑である。そこで取れる米や野菜が家族五人の生命を何とか支えてくれていた。なな（奈菜）が五つになった春、家族の間に亀裂が入ろうとしていた。婿が家を出ていくこ



とになった。わしら老夫婦が起こした何かが原因か、夫婦間で何事かあったかと年寄の心配が始まった。婿の実家が変わったことが起きたか。孫にはどんな影響があるだろうか、と気を揉むばかりだった。本人同士幼い子を挟んで如可許心配なことだろうか。

田植も済んで打ち上げ餅を手伝い衆や家族みんなまで食べた。ななも納得したのでろうか。傍目にもよくわかった。父親の傍で甲斐甲斐しく手伝い子にしている。野菜の苗も植えて、育っていく様子や調理する楽しみを話しているようだ。結論を聞いてからは仕方ないと諦めの境地だった。実家の兄夫婦を助けなければならぬ。ななど双子だった姉を子のない兄夫婦が育ててくれているのだ。半分は嬉しい思いもあり、本人にとっては複雑だろうと、同情する気も起きた。

別れの日、爺さんは一言も言葉をお交わすことなく庭先で見送った。娘とななどわしで送っていった。川縁はどこまでも続いている。早苗は夕暮時の風を受けて揺れている。やがてくる大水や台風のことなど知る由もないだろう。右には川に突き出た部落がある。左側には台が続き、今歩いている所は平坦な所だ。

「もうここがいい」

と婿は言った。各々が持ってきた荷物を受け取ると西に向かつて歩いていった。今度いつ合えるかわからない。娘の思いはどんなだろう。わしは家を離れていった子供たちのことを思いだしているのだ。頑張れと言葉を送るだけ手をさしのべることにもむずかしい。陽は大部傾いた。夕陽から溢れている黄金色が全景を包んでいる。畔に立つ

て行った人の姿を捜してみたが、もう見えなかった。里山も畑も田も凡て若葉色だ。細い苗は水面にたつ小波に揺れ、波が大きくなると苗も大きく揺れる。一枚二枚三枚四枚と小さな田毎に紅の玉が姿を写している。若い時から何度この景色を見、勇気づけられてきたことだろう。

「なな、いくつある。この赤い玉は、ななの希望だ。今度見つけた時は、大きな鍋を持って帰るといい」

別れの淋しさを消すかのようにお互いの胸の中に新しい輝きの火を灯して家路に着いた。

人が一人いなくなつて家の中の歯車が大きく変わったが、日は昇り明日への希望を与えて沈んでいった。月は暗から現われて毎夜姿を変えて安らぎを与えてくれた。野菜の育ちも目に見えてわかった。茄子が膨らみ、胡瓜が伸び、トマトが色づいた。

「お父が植えていった野菜だから、一緒にとろう」

と声かけしても決して行こうとはしなかった。母親の傍で調理の手伝いをしている。娘は預けた子が、どうしているか、当り前にみんなと食べているか、私の作った物を食べさせてやりたい…などの思いが募つて涙が出てしまったという。親だもの当り前だよと励ました。草々の生命力の強さには驚く。横に這い回り、競争して伸び上がり、あたりかまわず絡み合い逞しいものだ。わし一人では敵わない。爺さんに助けてもらつて一緒にと扱ふし楽しい。つい調子にのつて口が軽くなった。

「向うへ行った子にとつても、お父さんが行ったのだから嬉しいだろう。賑やかになって笑いが絶えないだろうね。羨ましいね」

と愚痴ってしまった。冷静な爺さんは、「あつちへ行けばこつちを心配し、当人にとつては苦しいことだよ。娘だつて頑張っているのにお前が世まい言を言つてはな」とたしなめられた。

後でわかつたことだが、ななは一人で出かけて行ったことがあつたのだ。父さんは釣りをしたり、魚とりも出来たから浜辺の方の家かな。いや田圃や畑仕事もしたからこの辺りかと真直ぐ行く部落を目標そうとしたが、父さんの話の中で「大きなお家」という勘が頭を過つて、今度行く時はこの坂を上つて行こうと決めて戻つて来たという。父さんをとつた人たちはいいだろうけど、なかなか厭だよ。とぶつぶつ言いながら帰つてきたという。夏祭りの太鼓の音が「元気をだせ、元気をだせ」といつてるように聞こえたという。ななは自分の力で道を開いていこうとしているのだと爺さんは満足気に聞いていた。

父さんと別れる時、おん鳥を捻つてご馳走してくれたことを思い出す。めん鳥三羽は毎日卵を産んでいる。餌をやるのは爺さんとななどで交代に与えていた。

「この家族は女だけで頑張っているか」

と爺さんは苦笑いしている。一年が経つて春になった。父さんの家で不幸ができた。病気だった兄さんが亡くなった。一家中で出かけることになった。道案内はなながするということで任せることにした。坂を上がる所迄は自信満々の案内だった。

「大きい家だよ」

と道添いに行く様子はいじらしかった。先にたつていこうとしている。



「お葬式のある家はここですか」

と人が出入りしている門の前に立って聞いていたが、手を振って、

「ここだよ。早く早く」とわしらをせき立てた。

大人たちはわかつていたが、ななの案内の成功にほっとした。ななは父さんを捜し、娘は出てきた女の子を抱いて、

「大きくなったね。よかった。よかった」と声が潤んでいた。みみ（実実）という名だった。顔は勿論同じだ。育つ所は違っても体つきも同じだった。娘はどんなに安心したことか。四日間はずしく過ぎた。夕暮の道を父さんとみみが送ってくれた。十五日の月の灯りの下を、やっと一緒にあった家族が六人で歩いていく。誰もがこの時間がこのまま続けがよいと思っていたことだろう。二人づつ話しをしながら坂を下りると入り江の傍を通る。水面に光の道が出来ていた。父さんが声をかけた。

「伯父さんはあの光の道を通って、インドよりもっと遠い国へ行ったんだよ」

「きらきらして金の砂の道みたいだね」

と二人はすっかり仲良しになっていた。暗には暗の美しさがある。田圃の水面で細い苗が揺れる。水面も動いている。そこに金黄色の輪が浮かんでいる。一枚二枚三枚と田毎に金の輪が浮いている。

「あの金の輪を掬うと幸せをもつことが出来るぞ。手で掬ってみるといい」

「赤い玉も綺麗だったけど、この金の輪は美しいね。拾えるように掬えるようになるう」

と二人で言っている。

楽しかった時間は過ぎた。次に合える機会を作っていくことにしようと約束して、父さんとみみ

は帰って行った。急に家の中が広くなってしまったようだ。

離れていた時間や理解し合うことはこれからいくらでも修復していけるだろう。爺さんと二人で願っている。

## 孔雀

小林幸枝

五月末に、ヤン・リーピンの舞踏劇『孔雀』を観に行ってきた。三年間待って漸く逢うことが出来た。感動の舞台だった。ブラボーを何度言っても言い足りない大感動だった。

ヤン・リーピンは、中国雲南省大理の少数民族、白（ペー）族の出身。幼いころから踊りに熱中していたが、一度も舞踊教育を受けることなく、天性の才能と創造力によって国内外に評価される舞踊家になった人です。

初めてヤン・リーピンの「孔雀の舞（孔雀の精霊）」を見た時の感動は今でも忘れません。手で孔雀の頭を、腕でその長い首を現し、波打つような細かい振動が手首から肩に伝わっていく。柔らかい身体の動きが凄かった。とても五十代の人とは思えなかった。

「孔雀の舞（春の精霊）」では、春Ⅱ生まれ、夏Ⅱ成長、秋Ⅱ衰え、冬Ⅱ死というテーマを孔雀の一生を通じた形で表現していくのですが、絶対的な舞いの言葉には圧倒されました。

中に、孔雀の合いの交歓を描くデュエットがあり、それを引裂く邪悪な黒鳥（カラス）が憎々しく、オスの孔雀が死んで、メスの孔雀が悲しみに

暮れて衰えていく場面では、涙があふれてたまりませんでした。

ヤン・リーピンの血を継ぐ十五歳の新星ツァイー・チーは、時間役を務め、春・夏・秋・冬と移ろう四季で二時間半位休まず回り続けたこと、ビックリしました。時の移ろいは静かで正確で平等にあることですべてのものの生きる物語を展開させる軸であることを凄いパワーで伝えていました。ヤン・リーピンの舞は柔らかく美しく流れ、観る人を感動の世界に引き込んでいきます。私もそんな舞いを演じたいと強く思いました。

## 供奉行列

兼平智恵子

石岡市民の皆さんはその年のおまつりが終わると「次のおまつりまで三六四日」と数え始めて心待ちしている石岡のおまつりまであと一か月余りとなりました。今年は九月十三日（土）、十四（日）、十の五日（月）の三日間行われます。

おまつりで華やかさを誇る十二町内の山車や人形そして三町内の獅子をご紹介してきました。今回は初日の神幸祭、三日目還幸祭において御祭神の御分霊が「御仮殿」へ渡御される時、そして還御なされる時にお供する供奉（くさむ）行列についてご案内します。

『民俗学者・柳田國男は、「まつり」を祭り」と祭礼とに区分して次のように考えました。

祭りは、祭事を営むひとである施主や氏子と、司る人である司祭や神主だけによって行われる儀礼です。冠婚葬祭、祈願祭、地鎮祭などの儀式は、

個人的な祭りとなります。一方、当事者と直接かわりのない見物人が参加するものを祭礼と呼びました。地域の年中行事や鎮守の祭りなどは祭礼であり、それらは次第に祭礼としての色彩を濃くしていきます。見物人の視線を意識した祭礼は、より美しく華やかなものへと変化していきました。これによれば、「まつり」は儀式である祭事と、見物人を意識した祭礼とに分けられます。「石岡のおまつり」の初日・神幸祭の神事は、午後二時まで總社宮境内で行われる一連の儀式であり、祭礼はそれ以後」の市内で繰り広げられるパレードです。祭礼は、花火を合図に出発した供奉行列が總社宮の鳥居から出たときから始まります」

（ワクワクふるさと紀行いしおか一〇〇物語 より抜粋）  
果たして、この供奉行列の始まりはいつ頃から：の疑問からはいりました。

先の「いしおか一〇〇物語」より参考とさせて頂きますと、江戸時代になると、石岡の町は、府中又は府中平村と呼ばれ宿場町（水戸街道）に変わっていきかつての国府域の村々はそれぞれに鎮守をまつるようになりました。しかしこの時代においても常陸國總社宮は府中域の総鎮守として大きな求心力を持ち九月の例大祭には、神前に相撲を奉納する大イベントが催され近郷近在の力自慢たちが集まりました。

この奉納相撲こそ大祭の中で最も古い伝統を持つ行事であり、現在は茨城県高等学校相撲選手権大会として開催されており、連綿と続いています。武双山や雅山など茨城県を代表する力士もかつて、ここで闘ったそうです。一方の府中の町には新たな民衆の祭りが広まって、京都の祇園会の流れをくむ、八坂神社の祇園祭礼が例年旧暦の六

月十三、十四日の二日間繰り広げられ、八坂神社は、府中の中心部、中町にあり、そこを出た神輿は華やかな行列を従えて高浜神社に向かい霞ヶ浦へ「御浜下り」をおこないます。

翌十四日は各町内から様々な風流物が出て町中は大きな賑わいを見せました。この祇園祭礼が終わった翌月の七月二日には愛宕神社の祭礼が繰り広げられ、そして九月には總社宮例大祭と町は三つのまつりで賑わいました。

明治期に入ると祇園と愛宕神社二つの祭礼が小規模化し各町中の風流物は總社宮の祭りに移行して行きました。

明治二十年、府中四組交替の年番制度が始まり、香丸町、中町、守木町、富田町の四町内が四年に一度年番町内となって祭礼を執り行うことになり、さらに明治三十五年になると石岡市内十六町による祭礼が制度化され、近代的な祭礼の始まりとなりました。そして現在では旧石岡市内三十六町内参加の盛大なそして華やかなおまつりとなっています。

最後になりましたが、供奉行列の始まりは明確な答えはでませんでした。總社宮の禰宜 石崎貴比古様に伺いましたところ今までの歴史をふんで徐々に現在の行列が確立していったとおもわれますとのことでした。現在の行列をご案内していきます。

まずかつての祇園祭、愛宕祭礼の神幸行列に先頭をきった全町で唯一の富田町の「さくら」です。その歴史は古く、「七度半の迎え」をうけねば登場しないという、格式高い出し物です。

続いて「昇殿の舞」を許された露払いの獅子、土橋町の大獅子。そして土橋町の相町、仲之内町

の大獅子。

続いて祭太鼓これは年番町の男の子（純粋で穢れていないと言ふ意味で小学生が選ばれます）が担当します。

真 神 總社宮内の神の枝を持ち左右に配置。  
猿田彦 神さまの先導をして道先案内を担う神です。

社銘旗 神社の旗

比礼鉾 二人で各一本を持ち、沿道の魔除けを担う儀仗です

祭典委員会 祭典委員長で「天国の宝剣」を持っています

四神旗 青龍・白虎・朱雀・玄武の四つの像あり、御旅所に各旗を立てて正しい方位を示し禍災を防ぎます。

氏子会長

錦旗 「日光月光の旗」ともいい天皇の御旗です。神幸祭・還幸祭には神様の旗として昔から用いられています。

唐櫃 衣装や供物が入っています。

神輿 「總社大神輿」と呼ばれ、明治三十年

青木町の棟梁小井戸彦五郎により制作され菊花紋は十六弁菊花紋になっています。

巫女 年番町の未婚の女子二人が担当します。

宮司 七人位加わります。

前駆 行列の守り人で四人です。

最後に 氏子総代、氏子会各町供奉員、年番町役員各六人が続きます。

どうぞ今年の石岡のおまつりには絢爛で厳かな供奉行列や出発前の儀式の見学もお勧めします。

主に供奉行列についてお話し伺いました。禰宜

の石崎様のご丁寧にご説明頂き有り難うございました。

・香り高く熱暑仰ぐ真白きユリ 智恵子

## 【風の談話室】

梅雨明けと同時に猛暑がやって来た。

梅雨明け前の気象予想では、エルニーニョの影響でこの夏は冷夏だと言われていた。しかし、エルニーニョがずれて猛暑になったという。

気象条件と人間の暮らしには密接な関係があり、時に思考回路までも狂わせてしまうようである。

身の回りに起こっている諸々の事象に目を向けるとただただ溜め息が出てしまいが、それを宥めるには歳の所為にする事しかないのだろうか。

7月に入って、この地に来ての数少ない友人が相次いで手術をする事になった。知らせを聞いた時にこんな一行が思い浮かんだ。

『遙々とやっこぎ』

また はるばると明日を歩く』

異常気象と同様に世の中色々不穏な動きがあるが、何があっても、命ある限り明日を歩かないわけにはいかない。

## 《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

モンゴルの風

田島早苗

人が生きる上で一番大切なものは何だろう。痛みが治まらない右手を抱え、少ナーバスになっている私は、来し方、行く末に思いを馳せながら

実りのない日々を、うだうだと過ごすばかり。日頃、八十年も生きたのだから何時お迎えが来ても平気”などと広言を吐いている割には終活の準備も出来ず、人間としての底の浅さをさらけ出している。

そんな個人的事情にはお構いなく、世界情勢は刻々と動き、TPP交渉、拉致被害者の救済と北朝鮮のミサイル発射、近隣国との領土をめぐる争い、更に従軍慰安婦問題の蒸し返し、等々日本を取り巻く条件は厳しさを増すばかり。持てる大国と持たない小国の底力の差が国対国の交渉に影響を与え、弱腰に成らぬようにと阿部のミクスが掲げた旗印が、憲法を骨抜きにして成立を急いだ集団的自衛権行使容認の決議決定なのだろうと思う。しかし地球は広い。大同土が利害絡みの争いをエスカレートさせ、人間不信に陥っている陰で、自然を愛し、皆が幸せになれるよう助け合って平和な暮らしを営んでいる少数民族の存在を忘れてはならない。そこには人間が生きる為の素朴な原点が有ると思う。

日本の大相撲に日本生まれの横綱が居なくなつて久しい。現在ではモンゴル生まれの三横綱が土俵を盛り上げているばかり。その風貌と巧みな日本語はまるで日本人。モンゴルと日本のルーツは同じだろうとひそかに思っている私。その他外国生まれの力士の数も、年々増え続け、国技の世界に早々とグローバル化が実現した感がある。

六月のある日、つくば市の「モンゴルアンテナ ショップMON」に顔を並べたヨイシヨする会のメンバー七人、今年のヨイシヨコンサートのために演奏したいとの願いを胸に、私たちの為にだけ演奏して下さるといふモンゴルの民族楽器馬頭琴の

登場を待っていた。

ユーラシア地方原産のチャヤルガンジュースに舌鼓を打ちモンゴルムードも高まった所へ黒づくめの女性が登場、日本の大学で学んだという謎めいた女性は、流ちょうな日本語で故郷モンゴルを語り、馬頭琴をかき鳴らす。その音色の衝撃的な迫力に圧倒されて言葉も出ない。大草原を駆ける馬の足音が聞えてくるようだった。

広辞苑によれば、モンゴルとは中国の北辺、シベリアの南、新疆の東に位置する高原地帯だと謂う。そう言われても地理音痴の私にはさっぱりイメージが湧いてこない。私の知っているモンゴルとは、ジンギスカンが大帝国を建設し、その孫フバイが中国を制し元国を設立、日本にも出兵して神風【台風】に遭遇、負けてしまったと謂う故事だけだった。現在のことは何も知らず、高原を移動しながら生計を立てている少数民族のイメージが脳の中に定着していた。しかし一九百二十一年に中国より離れたモンゴル共和国が、千九百九十二年にモンゴル国と改名し、国の面積百五十六万平方キロメートル、人口は約二百五十万人だといから、三十七万八百万平方キロメートルの日本国土よりはるかに大国なのだ、改めて認識し直しているお粗末な私だった。しかし広大なゴビ砂漠を含む過酷な地理環境が、良くも悪くも近代化の波に乗り遅れる結果を招いている?と思うのも、良く知らない故の偏見とまたお叱りを受けそうだ。この様に他国のことを芯から理解するのは難しい。観光で外面を見ただけで知った心算になるのが一番怖い。国同士がなかなか信じあえぬ大きな要因につながっている。

九月六日に開催と決まった陸平をヨイシヨする

会のコンサートでは爽やかなモンゴルの風を感じ、素晴らしい絆が生れることを信じている。思えばふるさと「風」とのご縁も陸平コンサートがきっかけだった。素敵な方々との出会いを大切に、もう少し生きてみたいと思いはじめている私だった。

田島さんのこの原稿は、7月号への投稿でしたが、印刷翌日の到着で今月号での掲載となりました。毎月第一土曜日が印刷日を予定しておりますが、最近、第一土曜日が早い日にちにつき、今月掲載させていただきました。

## 《読者投稿》

養生日記『持つべきものは友』

堀江実穂

一カ月少し前、私は、心の医療センターの本館で滑って転んでしまい、足を骨折してしまいました。ほんの少しの段差だったのだが、体重の重みで支えきれずスッ転んでしまったのだ。余りの痛さに顔が真っ青になり、冷や汗がだらだら出てきてしまい、その場に蹲り動けなくなっていました。デイケアの友達数人が一緒にいる時だったので、

「大丈夫みぼりん！」

「痛いのか？ 立ち上がれるか？」

と心配して声をかけてくれた。私は痛さのあまり、「有り難う」の声も出せず蹲ったままだった。そうしたら友達が、

「腕貸すから、ゆっくり立ち上がってみなよ」と抱きかかえられるようにして立ち上がった。

「ゆっくりね、ゆっくり…」

と声をかけられながら、友達の腕にしがみつくようにして立ち上がり、デイケアに辿り着くことが出来た。その間、友達は「大丈夫、頑張っ！」と、ズーツと声をかけ続けてくれた。人を気遣う優しさに涙が出るほど嬉しくなった。

デイケアでの友達は皆、幻聴・幻覚・妄想などに悩まされながらも社会復帰を目指して毎日一生懸命に通ってきている者達ばかりである。自分のことだけで精一杯の人達ばかりなのであるが、他人を気遣う気持は誰よりも大きい。友達の無意識の自然な行動には、心に包帯を巻いてくれたような感動を覚えた。

骨折した翌朝、別の仲間が車でデイケアに連れて行ってあげようと思ひ、私のアパートに来てくれた。私の足は、前日より腫れ上がって赤く腫れていた。それを見て、

「整形外科に連れて行ってあげるから今日はデイケア休みな」

と言って、整形外科へ連れて行ってくれた。おかげで今は一人で歩けるように回復してきた。

デイケアの友達は、弱い者が庇い合うというのではなく、必要としている人に手をかすのは普通の生活行動として持っている人ばかりである。持つべきものは友、を実感したばかりではなく、人は皆友という社会であることを願う出来事であった。

人間はすべからず平等、とは学校で学ぶ。しかし人間社会は色々な形で色分けを作り、それぞれの色分け社会に妙な尺度を与えて優劣、上下の關係を持たせようとする。堀江さんの投稿文を読みながら、

## 《一寸一言・もう一言》

|| 一寸一言 ||

温暖化の恐怖

菅原茂美

地球温暖化は、いかほどの害をなすのか？

豪雪地帯は、温暖化が進めば、除雪費や暖房費など、かなり助かるに違いない。北極海の氷が薄いか無くなれば、冬でもアジアと北欧など極めて短距離の「北極航路」が開設され、物流経費が極めて安くなる。更に寒冷地でも、温帯の農作物が栽培できるなど、悪い事だけではないじゃないか？…との話もある。

しかし局部的にはそうも言えるが、世界全体で見ればそうではない。温暖化が進み北極圏の氷が解けると、冬に寒さを北極圏に閉じ込めておけないくなり、中緯度地帯で逆に冬の寒さが厳しくなる。事実この冬の積雪は記録的であった。勿論年々夏の猛暑は増すばかり。温暖化が進めば、低地の水没・干ばつや、先日台風第8号が驚異的低気圧で暴れまくったように、強烈な気候変動や農業・漁業被害。更に家屋破損。それに交通網や通信網の寸断など被害は甚大。更にエネルギー問題や防災対策費など難問山積。

そして長期的視点で温暖化が何より怖いのは、マラリアなど、熱帯病が中緯度地帯でも蔓延し、ワクチンのない伝染病の防御が非常に難しくなる。熱帯には野口英世が研究中に感染死した「黄熱病」や、デング熱など、恐ろしい熱帯病は無数にある。

その媒介昆虫が温帯でも生息可能になるという事は重大問題である。

温暖化ガスCO<sub>2</sub>は現在地球で0・0365%だが、金星では95%で、表面温度は470℃である。灼熱地獄の重大要因。化石燃料を燃やし続けられ、地球も金星への一里塚となる。

## 名車の旅

打田昇三

政府が意図的に日本を「悪い」と印象づけている国では国民も親切な人ばかりではないが、日本の技術力は庶民が実感しているようである。そういう隠れファンに悪いから国名は言わないが中東の某国で千キロに亘るバスの旅をすることになり立派なバスに乗せられた。名車フォルクスワーゲンのマークが大きく付いている。乗客は二十人に満たないのに運転手、助手、整備手、ガイド、通訳と付き人が多いのが気になったが、バスは順調に走り出して直ぐ砂漠地帯に入った。

最初の休憩地点で乗降扉が開かないから窓から降りるように指示されたが、それからは停車予定の無い砂漠で何度も止まり、乗務員が車回りをいじっては走りしていたが、遂にオアシスの村で立ち往生をした。聞けばタイヤが破裂したという。見ると日本では古タイヤ置き場にも捨ててないような磨滅しきったタイヤである。乗務員が不満そうに「是は日本のタイヤなのだが」と言うが、廃棄物のような古タイヤは、何処の国の物で有ろうと破れる。幸いにオアシスに修理屋があり少しましな古タイヤに替えたバスはやっと本調子で走りだした。予定は大幅に遅れている。

添乗員が急がせると、パトカーに捕まると高い罰金を取られると運転手は怯えていた。他国の事で文句も言えないが、スピード違反ばかり取り締まっても整備不良を放っておいては危険である。トラブルを考えるとワーゲンマークも怪しい。

## もう一言

素晴らしき空港

打田昇三

日本一広い耕地面積を持つ茨城県には戦時中に百里基地など軍用の飛行場が何か所も置かれていたらしいが、戦後は阿見に民間の小型機専用空港があつたぐらいいしか知らない。そこに突如として百里基地に沿って民間の「茨城空港」が出現したのであるからは画期的な出来事であろう。野次馬根性で見学させて貰ったが立派な空港である。

そこで思い出したのが、かつて体験した素晴らしい？空港のことである。国名は敢えて伏せさせて頂くが、古代から有名な国で国土は山岳部が多く、鉄道は部分的にしか無いし道路だと目的地へ行くのに時間がかかり過ぎる。航空機が主要な交通手段になり各都市に空港が有ったのだが内戦で破壊されてしまったから、滑走路にする平地だけが残った。建物も格納庫も駐機中の航空機も無い。

一応はホテルを出て空港に送られたけれども誰も居らず空港ビルは無いから草原の中で杳然としていて係官が来て「荷物を広げる」と言った。地べたで検査を受け、暫く兎の様に草の中に隠れていると、向かいの山裾に飛行機が現れ着陸態勢に入ったのだが、見ると滑走路(に相当する草原)の手前には牛の群れがいて悠然と草を食んでいる

ではないか。「これは危険！」と思ったのは平和ボケしている日本人だけで現地のパイロットも牛も当然の様に双方が進路を譲り合い無事に着陸：定期便は我々を乗せて何事も無かったように目的地へ飛び立った。そのタイミングと言うか航空機と牛の協力は素晴らしい。近代的な茨城空港と牛の居る空港と、どちらが良いか？と質問されると困るけれども：印象としては忘れ難い。

## 《ことば座だより》

演奏会とは音の姿を演じる場

白井啓治

先日、北海道の若手ギタリスト亀岡三典君から、最近俳優さんの朗読舞台に演奏する機会が多くなり、人に見せる演奏と言うことも考えないといかないと思うようになりました、とメールが来た。

それで、以前に舞台での表現の基本的な考え方、という小論文を書いたことがあり、その原稿が残っている筈だと捜したが見つからない。十数年前のことなので、何度か整理している中に原稿のデータを処分したらしい。或いは、過去に三度パソコンが故障し、データを消してしまったことが有るので、その時に一緒に無くしたのかも知れない。掲載誌も何処だったか記憶にないので、亀岡君には簡単に「演奏会は音楽を聴きに来るのだからといって舞台上の演奏者を暗幕に困ったらブーイングが来る。演奏会といっても聴きに来るのではなく、演奏を見に来るので、演奏者には見せるということも重要な要素である」と返事を打った。そして原稿が見つかったら送りましょうね、と約束

したのであるが、どうやら原稿は手元にないようである。そこで、この際だから、舞台表現について、演劇・演奏・舞踊等に共通する基本について今一度考えてみたいと思う。

小林幸枝の手話を最初に見た時、彼女の手話表現に舞台での舞表現のスケール感をおぼえ、明日から私の所に来なさいと、半ば強制的に内弟子のようにしたのであったが、耳の聞こえない彼女には、音声言語としての言葉の姿を創りそれを舞にすることを教えた。

言葉には、普遍的な意味を持たせた説明手段としての側面と音の響きの組み合わせによる心情・感情表現としての側面の二つがあるといえる。二つの側面は相反するように思われるが、人のコミュニケーションとは、この両面をもつてなされることよってその密度が高まるといえる。

母音と子音と濁音の組み合わせよって一つの意味を持った単語としての言葉が作られている。そして、その単語としての言葉を紡ぎ合わせて行つて一つの文章としての話しが作られる。文章としての話しには、法律のように堅苦しいものもあれば、詩のように限定を嫌い無限に心に訴えかけるようなものもある。

法律としての文章の意味は流動的に変化するものではないが、詩の様な文化・芸術の領域にあるものは法律文と違って読む人のそれぞれの都合で流動的にかつ無限大な広がりをもつてくる。

見せる演奏から少しされるが、小林が内弟子のように通い出した初期に渡した指導文が出てきたのでちよつと紹介しておこう。

× × ×

○詩をどのように捉えて表現化するか…

詩は心の流れを著わしたものです。朗読は、文字に著わした心の流れを、音の流れ（音声言語）につくりかえて表現します。これに対して手話舞は、文字に著わした心の流れを、肉体の動作の流れ（動作言語）につくりかえて表現します。ここで大切なことは、朗読にせよ手話舞にせよ、聞く人・観る人に、詩の中に込められている心の風景をイメージ映像としてその心に映してやる事です。

私は、心の流れのことを「風」と認識し、定義してはいますが、風が吹くためにはその風が吹ける、流れる景色が必要です。

観客が、手話舞を観て感動するのは、演技者の描いてみせる景色の中に一緒に旅することが出来るからです。

音声言語も動作言語も、絵画言語や映像言語のように実際に視覚に見られる風景を描くことは出来ません。しかし、朗読を聞く人・手話舞を観る人達に風景をイメージさせることは出来ます。観客に風景をイメージしてもらうためには、俳優が詩という心の流れを文字に著わした文章から確り読み取り、風景をイメージできる音や動作を創造していかなければなりません。

実際の演技では景色そのものを演技表現することではできませんが、演技をする俳優が「いま私はこんな風景の中に立って、こんな心で演じています」という明確な景色を持って演技表現すれば、観客は俳優の誘導に従って同じ景色の中に入り込み、一緒に旅をすることが出来るのです。文字に表現された言葉は、手話の言葉に置きかえ、舞の中には風景を表現する動作の言葉を紡いでいく、ということ意識して表現プランを考えていきたいと思います。

× × ×

さて、本題に戻さなければいけないが、舞台での朗読と演奏には非常に類似したものがある。それは自作にしろ他作にしろ台本・譜面があり、それを基にして表現するという点である。朗読は文字を読むということで表現を創造し、演奏は、譜面を奏でるということで表現を創造する。何れも台本を読んで声か楽器で表現するという点において共通した所がある。勿論演奏では譜面を覚えて譜面なしの場合が多いが、譜面を見ながらの演奏でもルール違反とはならない。

ただし朗読の場合は言葉を読むという表現なので、たとえ台本なしで語んじられたとしても、手には台本を持ち、言葉を読まなければならない。

他の舞台も同じであるが、俳優・演奏家の舞台表現の基本は、台本（譜面）に書かれている物語を借りて、自分は何を表現するのかという、その台本を借りて表現するべき自分の物語を心に持つことである。

演奏会や朗読会が面白いのは、演じる人の演じたいテーマ・心を大袈裟な演技表現はないが全身で表現しようとする姿が楽しいのである。声によつて紡がれ描かれていく言葉の姿や、奏でる楽器の音色から物語の風を吹かせ音楽の姿を必死に描く演者の姿に導かれて物語の世界を旅することが出来るのである。

こんな背景があるので、演奏者を暗幕で隠したコンサートはつまらないし、金返せとなるのである。

音楽・演劇・舞踊等々すべての舞台表現とは、一つの台本があつて、その台本を借りて表現者たちがどのような物語をそこに紡ぎ出してくれるか

が見もの、見どころなのである。

演奏者が過度な作り演技を加える必要は全くないが、譜面（台本）を借りて、そこにどのような物語を描いてみせるかが、演者・奏者の役割であり、それを観るのがコンサートに出かける楽しみだといえる。

譜面通り寸部の違いがなく音を聞かせてくれるだけなら、それこそコンピュータで家で聞いていた方が、殺伐しさが自虐的快感をもたらしてくれるかもしれない。アナウンサーのように間違いない聞きやすく朗読をされるのなら、その物語を家で寝転がって読む方がよほど楽しい。

少し話は変わるが、庭の菜園に植えた苦瓜の花を改めて見ていたら、ちよつと乾いて粉を吹いた感じに咲く黄花に心を奪われてしまった。そして、どういふ訳なのか渡辺淳一氏の小説が思われてしまった。彼の小説に描く女性の顔がその黄花に浮んで見えたのである。

渡辺氏の小説は、初期のものしか読んでいなかったのであるが、苦瓜の花が彼の小説を読むように促してくれた。慌てて書店に出かけ、何冊か読み始めたのであるが、矢張り苦瓜の黄花の女性が出てくる。

これは私だけの勝手な思いなのであるが、苦瓜の黄花は渡辺淳一の世界に出てくる女性の花である。猛暑の中、少しばかり脳が溶けて来たかと思うが、物語というものは不思議な力を持っているものだと、今更のように感心している。

ことば座の小林幸枝の公演は、今年6月だけであるが、彼女には百の物語を約束しているので、何か題材を探り今の中に書き進めておかねばと思

っている。常世の国の恋物語もまだ三十四話だから、未だまだ先が長い。

友人一人の手術は無事に終わったところで、一人は既に退院をした。暑さが続きそうなのでくれぐれも無理せず養生して頂きたい。

今年も庭の菜園に黄金トマトが生り、毎日数十個のトマトをかじりながらこれで夏ハテはないと勝手に信じている。

## 【特別企画】

### 打田昇三の『私本平家物語』

#### 巻第二（1・1）

##### ・座主流（さすながし）のこと

「日本に武士が出現した」と言うか、合戦に際して即応できる集団が各地に現れたのは桓武天皇の時代を最初として、それが本格化したのが平将門の時代から東北地方で前九年の役や後三年の役が起きた時代である」と「日本外史（頼山陽）」は述べている。これらの仕事には皇統から分かれた家系の源平両氏が主に従事させられたのである。

古来、国家に関わる大事があつた場合には天皇が自ら指揮をして解決に当るのが建国以来の基本方針であつたけれども、藤原一族が皇統に入り込んで、失礼な言い方であるが天皇を独占して公家（公卿、殿上人）と言う特権階層を創り出し国民から隔絶してしまつた。源平両氏は下請けで雇われている中に其れに気付いたから、商売ものの武力を使って何とか独

立しようとした。

最初に実行した平将門は部下の社員（兵隊）がアルバイト中心であつた為に、肝心の売り出しに際して人手不足から失敗した。それ以後は源平両氏が相互牽制をさせられて独り立ちすることが難しかったけれども、平清盛は朝廷を利用することで或る程度の成功を見た。源頼朝は、平氏一族の中央集権で落ちこぼれたまま芽が出ない地方の平氏系武士団を取り込んで成功したのである。

平家の統領、とは言つても白河法皇の血を引くことが明白な平清盛は、皇室内部の対立と藤原一族の争いに起因する保元の乱、平治の乱を巧みに利用して権力の座を手に入れた。その清盛も努力はしたが公家社会を排除することが出来ず、平家を倒した源頼朝もまた然りである。無駄と権威主義の塊（かたまり）のような公家社会ではあるが、これが天皇家に結びつくとならぬ呪縛力になる。そして当時は仏教界に君臨していた僧兵の力も朝廷や公家にとって無視できなくなつて来た。

公家社会に封じ込められた朝廷、神仏を楯に僧兵軍を擁する寺院、そして新たな権力社会を目指す平家、いずれも民衆には何の役にも立たない此の三勢力が、相互牽制をしている中では形だけでも平和が保てるけれども、そのバランスが崩れると争いになる。

天皇家に入り込もうとする平家に対して皇統から亜流を排除したい後白河法皇や公家たちは平家の力を弱めようと画策し、強大化し過ぎた僧兵軍団が平家潰しの道具に使われる。僧兵は裏事情を知らないから暴れ回り、暴れ過ぎた為に傷を深くして分裂の危機を生じることになる。まず狙われたのが、平清盛の推薦で延暦寺の座主に任命されていた明雲大僧正であるから、平家の基盤も徐々にではあるが盤石で



は無くなった。

・座主流（さすながし）のこと

文字だけ見ると座つて調理が出来る近代的システムキッチン（さすながし）の宣伝文句のような表現であるが此の場合の「座主」とは、株式会社比叡山延暦寺の社長に相当する高僧である。明雲大僧正という。その偉い坊さんが流罪にされる：と言うのが表題である。是までの平家物語の流れからみると此のタイトルは不可解である。なぜかと言えば十五年に亘る治世のあと、四十数年に及ぶ院政を行つて来た白河法皇さえも「意の俛ならぬ」と嘆いていた僧兵たちの元締が突如として流罪にされると言うのである。何が起こつたのであろうか？

大作「新平家物語」を書かれた吉川英治先生は「平清盛ほど悪く言われて損をした人は居ない」と述べておられたそうだが、此の「座主流」などを見ると其れを実感する。何を考えているのか、何を仕出かすか分からない点では平清盛を凌ぐ人物が高貴とされた当時の階層に現れたのである。つまり平清盛は、その人物に裏切られたり、翻弄（ほんろう）されたたりして怒りまくっていた頃に後継者の重盛に先立たれ、次いで源三位頼政や伊豆の頼朝に叛（そむ）かれたから、血圧が沸騰点ぐらいに上昇して死亡したのであろう。

平家物語巻第一は「内裏炎上」で終わっていて京都の大火災が起きる前に、神輿を先頭に都へ第二次攻撃（デモンストレーション）を掛けようとする僧兵軍団を、平時忠が後白河法皇の使者となつて説得する記事があつた。平家物語の読者は、京都大火災が神仏の祟りだと思わせる記事の後であるから双方の和解

が成立したと思つているところへ、巻第二では「座主流」で、いきなり高僧が流れて来るので驚く。桃太郎の御伽話に聞きなれた昔の児童たちでも呆れるような筋書きである。

治承元年（一一七七）五月五日（正確には年号が治承になつたのは八月なので此の時点では安元三年）に突如として明雲大僧正が宮内庁御用達を免職されてしまつた。この人は村上源氏で権大納言を務めた源頼通の子であり、十年ほど前に平清盛の支持を受けて天台座主になつた人物である。なお当時は大僧正でなくて未だ僧正であつたらしいが平家物語は大僧正にしている。

とにかく明雲は朝廷のお抱え僧侶として担当してきた宮中関係の祈禱行事やら法会、天皇の厄除け祈願など、一切の職務を剥奪されてしまつた。そればかりか、比叡山には司法警察の検非違使庁（けびいしちよう）から役人が来て、犯罪者として大僧正を逮捕して行つた。逮捕状には「内裏へ神輿を振り掛けて来た僧兵たちの最高責任者として其の責任を問う：」と書かれていた。なぜ唐突にそうなつたのか？と言えば、幾つかの要素があるけれども最大の理由は後白河法皇が平家との対立姿勢を明確にしたからである。つまり「坊主憎けりや袈裟まで憎い」と言う諺を履き違えて平清盛が推薦した坊さんの明雲から袈裟を剥ぎ取ることにしたのである。

事の発端は、加賀の国に在つた延暦寺の末寺に対して当時の国司・近藤師高兄弟が不当な行爲をした。延暦寺側は其れを訴えたのだが、近藤兄弟の父親は後白河法皇の側近として権力を振るう西光法師こと藤原通憲であつた為に訴状が受理されなかつた。憤慨した僧兵軍団が神輿の威厳を乱用して都に暴れ込む騒動を起こし、朝廷側では止むを得ず近藤兄弟を処罰した。是を恨んだ西光が後白河法皇に「こうい

う裁定は最低であり、国家の大事」と告げ口をしたことから事件が始まつた。

原文には「：西光法師父子が讒奏（さんそう）他人を蹴落（きりりん）す為に事実を偽つて申し上げる」によつて、法皇大いに逆鱗（げきりん）天子の怒りを龍に例えた言葉あり」と書いてあるが、政策の転換とは言つても、側近の言うことを鵜呑みにする人物は君主失格だし、其処まで言うのならば最初から僧兵たちに断固とした処置を指示すべきであり、暴動の後に平時忠を派遣して僧兵たちを宥め（なだめ）させたのは後白河法皇なのであるから、此の人は自分で消した火を煽（あお）いで火事を起こすような行動をしたことになる。

つまりは自分の息子たちが処罰されたことで当代の天皇を恨んだ西光が、天皇家と近い平家及び平家と親しい延暦寺の明雲に報復する目的で後白河法皇を焚きつけた。法皇は当時の天皇よりも権力を持つていたのである。丁度、好い塩梅に？後白河法皇も平家の繁栄を嫌悪し始めていたから、見えも外聞も無く「嫌がらせ」を開始した。

後白河法皇は「天皇に相応しくない人物」と言われながら、他に該当者が居なかつた為に天皇・法皇となつたらしいので、狙われた人には諦めて貰うとして、此の法皇が「特に罪を重くせよ！」と親切に言つてくれたから、明雲は覚悟を決めて先ず、座主の証拠である職印と宝蔵の鍵を朝廷に返納した。つまり辞職したのである。そして五月十一日には鳥羽上皇の七男、後白河法皇には異母弟になる覚快法親王（かくかいほうしんのう）こと僧・円性が第五十六代の天台座主に就任した。代表的な、お手盛りの人事である。円性は、京都東山に在る天台宗の門跡寺院（もんせきじいん）皇族貴族が僧となる寺、青連院の大僧正であり、青連院を開いた行玄の弟子である。なお行玄は

後冷泉天皇時代から右大臣を務め、白河天皇代に摂政関白となった藤原師實の子である。

新しい天台座主が決まった翌日、当然だが先代座主は職を止められサービスとして二人の検非違使役人によって拘束された。その住居の井戸には蓋がされた上で火の使用が禁じられた。これは火災予防や節水対策では無く、罰としてガス・水道の使用を禁じたのである。ライフラインを止められては、幾ら高德のある坊さんでも生きてはいけない。後白河法皇は素晴らしいことを思い付く。此の話が比叡山の僧兵たちに伝わると、当然のことながら黙っては居られない。四月十三日のようにデモ行進をして京都に進撃しようという相談が纏まりかけた。今回も神輿を使うことになったかどうか記録は無いが、都の人たちは四月二十八日の大火災で壊滅的な被害を受けたばかりであるから、災害の後に騒動が起きたらどうなるかと恐怖に震えていたのである。

そういう庶民のことには全く配慮せず、五月十八日には太政大臣以下の高級公家たちが、部分的に焼け残ったと思われる宣陽殿(天皇の居る紫宸殿に近い建物)で明雲大僧正の処分をどうするか、会議を開いていた。其の時に、多分、殆どの公家は仏教界と後白河法皇とに遠慮して何も発言が出来なかったと思われる。すると末席に居た左大弁(参議の下・従四位の職)の藤原長方が手を挙げて次のように勇氣有る発言(具申)をした。

「法の専門家に罪状を判定させたところ、死罪を減じて遠方に流罪とすべし、との意見が出されました。然しながら前座主・明雲大僧正は釈迦の教えを絶対の拠り所とする天台宗の教義と、大日如来の教えに基づく真言密教の両教義に精通されたお方であり、平素から心身を清浄に保ち戒律を護って座主に

相応しい日々を過ごされています。その上、公家には大乘仏教の法華経を教え授け、法皇には菩薩となる為の大乘の戒律を授けておられます。つまりは朝廷始め公家社会の仏教の師であり戒律の師でもあります。その様なお方に重き罰を与えるようなことになれば御仏が如何に思われることでしょうか：此処は、取り沙汰されている死罪又は還俗・遠流の罰を減じて、軽い処分を行うべきかと存じます：」

堂々と述べた藤原長方の意見に対して会議に出ていた全部の公家が尤もである：と賛成をしたのだが、後白河法皇は怒りまくって許そうとせずに：と言うよりも、後白河法皇は狙いを平家に定めていて先ず平家に近い明雲大僧正を失脚させる手段に出たのであるから妥協はしない。予定通り遠隔の地に流されることになった。律令で定められた流刑(遠流)の地には常陸国も入っていたから、或いは明雲大僧正が石岡に流されて来る可能性も有った。判決に異議を唱えた藤原長方という人物は、紫式部の家系になる勸修寺流藤原氏で後に中納言となり、京都八条堀川に屋敷があつたので八条中納言と呼ばれていた人物である。

同じ頃に太政大臣であつた平清盛も後白河法皇を訪ねて、明雲大僧正の罪を軽減して貰うように願おうとしたのだが法皇は「風邪をひいている」と言つて清盛に会おうとしなかった。怪物のようなお方が風邪をひく訳はないから仮病に決まっているが、予防注射をしていかなかった清盛は諦めて帰るほか無かつたのである。こうして法皇は人々の反対を聞かず、僧籍に或る者を罪人とする例に従つて高僧としての認可状を返納させ、一般人とした上で「大納言大輔藤井松枝(だいなごんたいふじいのまつえだ)」という田舎の銘菓製造元のような名を付けたのである。源平

盛衰記では「藤原松枝」になっているから其の方が正しいかもしれない。どちらも高僧に相応しい名では無いし大納言大輔という地位も無いが、大納言の補佐なら格としては軍人の大将ぐらいにはなる。

この明雲大僧正は桓武平氏などのように皇族の末裔である。かつて菅原道真を登用した醍醐天皇の子で第六十二代天皇となった村上天皇には数え切れないほどの子女がいたが、その中の第七皇子・具平親王を始祖とするのが村上源氏である。具平親王から六代目が久我大納言と呼ばれた源頼通で明雲は其の子供になる。此の明雲大僧正は(宮中会議で藤原長方が述べたように)他に比すべき者がいない学識と徳を備えたお方であり天下第一とも言える高僧であつたから天皇も家臣もあまねく尊敬をしていた。その為に延暦寺の座主の他に大阪の四天王寺と、京都の左京区に置かれた六つの勅願寺(天皇の勅願で建立された寺院)である「六勝寺」、すなわち法勝寺、尊勝寺、成勝寺、延勝寺、最勝寺、円勝寺の別当(座主に相当する)を兼ねておられたのである。

然しながら、世の中には余計な事を言う奴が居るもので、当時の陰陽頭(おんみょうのかみ)映画でお馴染みの陰陽師の長である阿倍泰親が、「あれ程の智者であるお方が明雲と名乗られたのは合点がいかない！」「明」の字を分解すると日月になるのに、その下に雲を置くととは不可解である」と難癖を付けた。ただし実際に阿倍泰親が陰陽師頭になったのは何年も後らしいから、この話は平家物語の作者が、サービスとして明雲大僧正を悪者にする為に付け足したものでらしい。

その明雲が天台宗の座主に任命されたのは仁安元年(一一六六)二月二〇日のことであり、三月十五日には「御拝堂」と言つて根本中堂を拝礼する儀式を

行った。その際に中堂の扉を開いたところ格納してあった多くの貴重な宝物の中に白い布で覆われた三十センチ四方ぐらいの箱があった。

此処の宝物を開ける者は、生涯に渡って男女の交わりを行わないことが条件である。明雲師は正にその条件に合ったお方なので（確かめようがないけれども）

箱を開いてみると経文などを書く黄色い用紙の巻物があつた。これは伝教大師・最澄が未来に比叡山延暦寺の座主となる人物の名を予測して書き遺されたものである。座主となった者は、それを開いて自分の名が有ったところまで見たら巻き戻して置く習わしである。明雲さんもその様になされたので有ろう。それにも関わらず明雲大僧正は高貴な身で有りながら前世の宿業を免れることも出来ずに、今回の様な不運に見舞われてしまったのは誠に哀なことである。

安元三年五月二十一日、適当な名前を付けられた明雲大僧正は、流罪として行かされる場所が伊豆国と決められた。温泉に入れて良かった！などと言つては居られない。当時の都の人々にとって東の国は未知の世界に等しかった。明雲大僧正の処分については「何で？」と思う者が多く、それぞれに噂をしていた。是は後白河法皇の側近である西光法師が、息子を処罰された恨みを比叡山に向けて法皇に告げ口をした為に起こったことなのであるが、裁判官は裏の事情は無視して法皇の指示どおりに判決を下した。現代では裁判の迅速化が求められているが、明雲被告への判決は正に手本となるもので、その日の中に「判決即執行」が実現し流刑地に行かされることとなった。

早速「今日中に都の中を追い出すように…」命令を受けた検非違使庁の役人がやって来た。役人の職名を「追立の官人（おったてのかんにん）」又は「追立の

鬱使（おったてのうっし）」と言つたらしいが家畜並みの扱いである。京都東山栗田口に在った比叡山東塔の青連院里坊に居た明雲被告は、泣く泣く其処を出されて一旦は大津に通じる街道の一切経谷（延暦寺の別院）に移された。其処が東国へ向かう道中の起点になるのである。

其の頃、延暦寺では座主流罪に憤慨する僧たちが集まって「…今回の決定は後白河法皇により行われたのだが、つまりは側近の西光が告げ口をしたことによる。我らの敵は西光父子である！」と確認して、然るべき報復の手段を実行することになった。僧兵を動員して法皇殿を襲撃すれば済む話だと思つたが、なぜか今回は別な手段にした。

其の手段とは寺院でなければ出来ない呪詛（じゆそ）つまり、呪い殺す方法である。先ずは対象人物となる西光父子の名を紙に書いて、それを比叡山根本中堂に置かれた十二神将のうちの金毘羅大将（こんびらだいしやう）像に踏みつけて貰うことにした。隙間が有つたのは左足下なので、其処に挟んだのである。呪いの言葉として「十二神将七夜叉、直ちに西光父子の命をお取り下さい」と一斉に叫んで呪詛したのである。聞くも恐ろしいことであるが、西光父子は没落するから、効き目が有つたと言えれば有つたことにはなる…。

この十二神将とは、仏教で薬師如来に従事して同時に其の徳相を分け持つとされる夜叉神（インド神話で森林に住む神霊）であり、薬師経を読む者は信仰する者を護ってくれるという。薬師経を読まない者は、どうなるか知らないが忿怒形（ふんぬけい）という怒つた顔をしているそうで怖い神仏であることは間違いない。何処かで行き会つたら逃げるように名前だけ列記しておく、宮毘羅（みやびら）、伐折羅（はせら）、

迷企羅（めきら）、安底羅（あんちら）、彌羅（あねら）、珊底羅（さんちら）、因陀羅（いんたら）、波夷羅（はいら）、摩虎羅（まこら）、真達羅（しんたら）、招杜羅（ちとら）、毘羯羅（びから）の十二神であり、七夜叉は多数の鬼神（仏法守護の鬼神）…金毘羅大将は宮毘羅神のことである。

翌日（五月二十三日）、明雲大僧正は一切経谷を発つて配所（伊豆）へ向かう旅に出られた。平家物語には触れていないが、徒歩では無く其の辺で働かされていたような瘦せ馬に粗末な鞍（くら）を置いて乗せられたか、罪人用の駕籠に入れられたようである。勿論、送別会も見送りの供も許されず、先ほどの追立て役人が先に立って進んだ。僧職としては最高の地位に在ったお方が、今日限り都を出て逢坂の関（現在の大津市に置かれていた）を離れ、見知らぬ東国へ行かされるお心のうちを推し量れば誠に哀れである。琵琶湖畔打出の浜に出れば、それまで過ごしていた比叡山延暦寺の高檣である文殊楼の軒が朝の光に白々としている光景を望めるけれども、この景色を二度と見ることが出来ないと思つと悲しくて、着衣の袖を顔に当てて涙にむせばれたのである。

延暦寺には年功を積んだ老僧や徳の高い僧も大勢居たのであるが（後白河法皇と寵臣の西光を恐れて）誰も明雲大僧正を見送ろうとしなかった。その中で先の平治の乱で反乱者に殺害された信西入道の子である澄憲法印（巻第一「鹿谷のこと」に登場）が、其の時は未だ僧都（そうず＝僧正の下）であつたけれども余りに名残惜しいので瀬田川の河口西岸にある栗津までお供をしていった。

何処までもお供をしたいけれども、それは許されない。栗津でお別れした際に、明雲大僧正は、その志の切なることに感じ入つて「一心三観の血脈（い

っしんさんかんのけちみやく一切を空として物事を見る観想法で、血脈相伝のもの」を伝授した。血脈相伝とは師から直弟子に伝えられる教えである。つまり本来ならば延暦寺又は天台宗として選ばれた者に伝わるのだが、明雲大僧正は自分の一存で血脈相伝の法を澄憲法印に伝えたということである。仏教がらみの話なので、やたらと面倒な名称が出てくることを御断りしておく。

此の法（一心三観の血脈）とは、釈迦が弟子に授けられた教義であり波羅奈国（はらないこく）現在にはガンジス川中流域左岸のサルナート）の馬鳴比丘（めみょうびく）釈迦入滅後六百年ほどして活躍した仏教学者から、南インドの龍樹菩薩（りゅうじゅばさつ）馬鳴の弟子である迦毘摩羅尊者に師事した仏教学へと伝えられたものであり、明雲大僧正はそれを会得していたのである。我が朝（日本）は粟散辺地の境（そくさんへんちのさかい）仏教大国の中国から見れば粟粒のように小さく、然も辺地にある）にも関わらず、時代が濁世末代（じよくせまつだい）仏法が衰えて穢れた時代）であるのに、明雲大僧正から澄憲法印へと血脈相伝の秘義が伝えられた。澄憲法印は是を会得して師との別れに涙しながら都へと戻ってきたのである。その心の中は尊いものがある。

此の部分は、良く考えたと平家物語に無くても良いように思うような仏教界の話になっている。その理由として学者の意見では、平家物語が語り物として成立する過程で、澄憲法印の流れを汲む説経師が関わった：仏教の宣伝に使った、と見ているようである。それはそれで受け入れるとして序（ついで）であるから「一心三観の血脈」の発祥地と思われるサルナートについて触れておく。

サルナートは、インドの首都デリーから南東へ六百数十キロ離れたガンジス川の聖地ベナレスに隣接

する地域にあり、釈迦が初めて説法を行った場所つまり「初転法輪の地」として知られている。

釈迦は当時の習慣に従ってバラモン教に基づく修行をしたのだが、その無意味さに気付いて山を下りブツダガヤの菩提樹の下で悟りを開く。二百五十キロを歩いてサルナートまで来た釈迦はバラモン教の教えに疑問を持つ僧たちに真理を説き仏教教団としての活動を開始したのである。サルナートには鹿島神宮と同じく鹿が多くいたようで鹿野苑（ろくやえん）と呼ばれる森がある。宗教と鹿とは何か関係があるのかも知れない。平家物語でも鹿ヶ谷が出てくる。大塔など紀元前三世紀頃からのもので三蔵法師が「建物は空高く聳え、伽藍（がらん）内部の精舎は高さ百尺余」と記録した当時を偲ぶ遺跡がサルナートに現存する。

話を明雲大僧正の処罰に戻して、比叡山延暦寺の僧たちは、流罪にされる大僧正を見送ることもしなかったけれども、流石に大僧正が居無くなると無法な流罪に憤慨する者が出てきて（怒るのが遅いけれども）決起集会を開いた。其の場では集まった僧侶、僧兵たちが、自分たちへの反省を込めて口々に次のような主張をした。

「義真和尚（ぎしんかしょう）天台宗を開いた最澄の高弟）が延暦寺の座主となつて以来、第五十五代の明雲大僧正に至るまでトップが罪人にされたことは無い。そもそも延暦（えんりやく）年間（七九四）に桓武天皇が京都を都に定められるに先立って、伝教大師（最澄）は比叡山に登り根本中堂を建立して天台の教法を広められた。此の教えは中国・浙江省（せつこうしょう）に在る中国三大霊場の一つ天台山に伝わったもので四明の教法と呼ばれる。それ以来、女人禁制の霊山として三千の僧（自分たちで穢れの無い清僧だと称してい

る）が住んでいる。

此の峯には唯一無比の經典として法華経を読み是を暗唱する学僧たちの姿が絶えず、比叡山麓には七つの社があつて其の霊験は日々新たである。

其の昔、インドに於いて釈迦が修行をした靈鷲山は王城の東北に在る（サルナートからは二百数十キロ東になる。現地名ラージギル）奥深い岩屋であるが、此の比叡山も帝都（京都）の鬼門に聳える護国の霊地として代々の賢い君主や優れた公家の治世下において此処に仏道修行の道場を設けることが出来たのである。その比叡山に罪を与えるような、当代の君主に相当する後白河法皇は賢主では無い！いくら末世のこととは言つても、英明では無い人物によつて、此の霊場が傷をつけられることは情けないことである……そのようなことをされてたまるか！——こうして比叡山延暦寺の全員は抗議の為に山の東へ降りて行った。（つづく）

## 《ふじ》

アソビの書・書道会館理事のおおぞ。

（ギター文化館通の）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-2063

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

# 会報「ふるさと風」100号祭

9月21日、22日、23日香丸通り／みんなの広場2F

(午前10時～午後4時半 入場無料)

会報「ふるさと風」が9月号をもって通刊100号を迎えます。  
100号を記念して、「ふるさと風100号祭」を開催いたします。  
創刊号から8年4ヶ月の歩み展をはじめ、記念講演会、朗読会などを  
企画しております。また、会場には兼平智恵子の石岡散歩絵と常世の国  
の五百相の展示も行います。

9月21日(日)午後1時半:記念講演「文化力がふる里を救う」

講師:市川紀行(市川紀行・元美浦村村長・陸平をヨイシヨする会会長・劇団「宙の会」主宰。)

(講演のプロローグとして筑波山に詠んだ万葉集を小林幸枝の朗読手話舞を演じます。また講演後、市川氏を囲んでの座談会を予定しています。)

9月22日(月)午後1時半:朗読会「新鈴ヶ池物語」(朗読:白井啓治)

(朗読会后、風の会会員との座談会を予定しています。)

9月23日(火)午後1時半:朗読会「新説柏原池物語」(朗読:白井啓治)

(朗読会后、風の会会員との座談会を予定しています。)

ふるさと風 100号祭に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>